

藤崎慎吾・田代省三・藤岡換太郎著「深海のパイロット」

竹内章*

On “Pilots for Deep Submergence”

Akira TAKEUCHI*

沖縄トラフの熱水活動をはじめ、超高速拡大の現場（東太平洋海膨）や北フィジー海盆での背弧拡大などの海底火山活動の調査、ハワイ海嶺の巨大海底地すべりの研究などで活躍した「しんかい2000」（以下、2Kと略称）や「しんかい6500」（6K）の名はご存知であろう。本書はそれら日本の潜水調査船のパイロットの体験や深海科学へのかかわりを描写した読み物である。巻頭には4ページにわたるカラーグラビアがあり、2つの潜水船の姿や潜航調査の行程が手にとるようにわかる。

本書の構成は3部からなり、総ページ数315の70%をあてた第1部は本書の編著者、藤崎慎吾氏（作家・サイエンスライター）が担当し、深海潜水調査船のパイロットへのインタビューと、支援母船での乗船取材を中心に書かれている。潜水調査技術の生い立ちから潜水船の操作方法や将来への夢などを取り上げた7つの章に分かれる。第2部は海洋科学技術センターのベテラン深海パイロットを代表する田代省三氏が、6Kの覗き窓から見た世界を紹介する。また第3部は藤岡換太郎氏が日本で最も多く深海を訪ねた地質学者として執筆し、2Kがもたらした10大発見を指摘する。

本書の表題は火山学とは無関係にみえるが、藤岡氏が挙げた発見の半分は海底の火山や熱水活動に関係する。なにしろパイロットたちの「おすすめスポット」は、海底全体がガラスのようにキラキラ光るシートフローで覆われた北フィジー海盆だという。それだけに第1部では、日本で初めての潜水船による海底熱水採取の苦労話、大西洋中央海嶺での熱水活動のモニタリングにまつわる日米対抗の腕自慢など、火山や熱水にかかわるエピソードが紹介される。

熟練したパイロットは「こんなものがありますけど、

どうですか」（p. 53）と、火山学者を立派な火山岩露頭に連れて行ってくれる。そうなる、潜航研究者にとってのパイロットは水先案内人以上であり、深海科学専門のスペシャリスト兼パートナーであると思われる。

深海には、まだ世界中でほとんどの人間が目にしたことのない風景がある（p. 165）。とりわけ、海底火山のようにカメラ画角を超える対象については、研究者の目に触れないままパイロットの脳裏に仕舞い込まれている風景や事象があるに違いない。ところが、日本はもう有人潜水船は建造しない方向にあるという（p. 3, p. 170）。

有人の潜水調査船はなぜ必要なのか。これは、2Kの運航休止や6Kの将来にからめて、第3部第二章で藤岡氏が提起した問いかけである。氏は「人間の目」「知的好奇心」「臨場感」「勘」の4つを理由に挙げた（pp. 293–295）。「あとがき」では、宇宙も深海も、その素顔は「人が行ってみなければわからない」（p. 310）という宇宙飛行士毛利衛氏の言葉が紹介されている。確かに、無人船がプログラムされたとおりに運航されたとしても、神秘の謎を発見できるわけがない。

しかし藤崎氏は、「有人が無用と考える人が出てきてしまった背景には、有人活動をしてきた側にも一定の責任がある」と厳しく指摘する（p. 180）。

いま、新しい有人潜水船を建造しようという動きは、世界で唯一、米国ウッズホール海洋研究所にあるだけである（p. 170）。日本で2Kの休眠状態を解除するには火山学や生物学など研究者側からのサポートをはじめ、一般国民や子供たちの応援が不可欠である。田代氏も、これからは子供たちを乗せて潜らせたいという（p. 181）。

本書は、深海潜水船の操縦法とか、深海の観光スポット紹介や危なかった話などが織り込まれ、潜水調査船にはなじみがない方にも楽しめる。まして陸上の火山や地熱地帯の調査経験がある読者を引き込まないではおかないだろう。深海潜航調査のプロポージョンを準備する方はもちろん、潜水船で深海底の調査を試みたいという若手火山学者にも必読の書である。

* 〒930-8555 富山市五福 3190
富山大学理学部地球科学科
Department of Earth Sciences, Faculty of Science,
Toyama University, Gofuku 3190, Toyama 930-8555,
Japan.
e-mail: takeuchi@sci.toyama-u.ac.jp